

まま反映し、その集落単位で共同に生活し、作業が進められていた。従って、この地区は、他の開拓地に比べると、統合・結合性の高い地域になった。

開拓地での花祭りは、豊根村の分地集落の祭り道具を譲り受けたことをきっかけに開始される。祭り形式は、豊根村の祭りをベースにし、そのしきたり等を保持してきた所もある。しかし、異なる集落が入植している開拓地でもあったので、各集落の舞いを集大成したり、独自の祭り組織を設置したりして、当初から御幸神社だけの独特な性質を持った花祭りが展開されてきたと言える。

花祭りを再生した背景の一つには、祭り道具の譲られたという事実が大切であった。というのは、花祭りの中心である鬼舞いが村人の崇拜対象であり、祭りをを行う為には面という象徴が必要だったからである。もう一つの背景には、花祭りが村人に生まれながらにして習得されていくものであつ

たことが挙げられる。つまり、彼らは当然の事として花祭りをを行い、普段はその意味を考えたりはしなかった。そして、このような花祭りの持つ身体性が、開拓地での花祭りの再生を促したとも言えるだろう。

まとめに、花祭りが「伝統」として語られた場合を分析すると、後継者問題の時と村人以外の人に花祭りが重要であると言われた時であった。ここから、「伝統」が「伝統たらしめられる」側面には、その存続が危ぶまれる状況や外部者の視点によって価値付けられる状況があると思われる。しかし、花祭り自体、非常に特徴のある事例であるので、さらに他の事例も調査する必要がある。従って今後は、世代による「伝統」の捉え方の違い、「伝統」と社会構造の変容との関連性などの視点もふまえて、さらに「伝統」というものを考えていきたい。

日系社会における エスニック・アイデンティティとエスニック・シンボル

—カナダ、バンクーバーを事例として—

佐藤純子

(掲載論文)

自動車交通量と気温の定量的考察

—東京都練馬区南田中の自然交通量データを用いて—

大道寺美保

都市において、ヒートアイランドが形成されていることが明らかになっている。ヒートアイランドの要因として、建築物の高密・高層化、道路の舗装化、人間による人工排熱の放出の増大が挙げられる。

本研究では、要因の1つである人工排熱、特に自動車交通による排熱に焦点をあて、自動車交通量を排熱の程度を表す指標として仮定し、自動車交通量の大小がヒートアイランドの都市キャノピー層内の気温変化に影響しているかについての

定量的考察を行った。

交通量のデータは東京都より入手した。都は都内22箇所では交通量を計測しており、その中からフィールドとして環8沿いの1地点(練馬区南田中)を選定した。気温のデータについては、計測器付近の環8の歩道、比較対照地点として中学校、小学校で8~10月の間実際に連続観測を行ったものを使用した。

まず全体の变化を要因別に考察した。具体的には、

- A. 地表面の違いについて
- B. 百葉箱について
- C. 地形、緑地効果について

で、特にCについては、観測地点が緑地が比較的大きい歩道上であったことから、この歩道では車道とは別のキャニオンが形成されており、緑地効果の影響が大きい可能性があると考えられ、次の解析への留意点となった。

次に地点間で気温差を求め、交通量のデータに対応させて1時間値としたものを用いて、交通量と気温について2通りの解析と考察を行った。具体的には、

- ① 同一時間帯による相関
- ② 時系列による相関

で、①は風向別に24時間分について、1時間毎に交通量と気温差について相関を調べた。高い相関はほとんど見られず、このことから、同一時間帯においては気温差は季節あるいは日によって変化の程度が違い、日射・風などその他気候要素の変化の複合がこの程度を左右していると考えた。

そこで②の時系列による相関を昼夜に分けて調べた。相関が高いものは夜に多く、その時の風向

を調べたところ、E方向の風が卓越している割合が高かった。

環8はこの地点においては南北方向に走っており、E方向の風は環8を垂直方向に卓越していると考えられる。測器は西側に設置されていることから、E方向の風が卓越している時は歩道へ道路の気塊が流入するため、気温は交通量の多い道路の気塊のものを示しているともみなすことができる。このことから、道路の気塊内の温度の変化は交通量の増減を受けているとの結論に達した。

本研究では観測地点が緑地効果など他の影響についても考慮する必要があったため、交通量と気温は風向などの条件を踏まえた上で相関があるとの結論に達したが、このことは逆に言えば大気汚染に関してそれだけ緑地（帯）の抑制効果が強いとみなすことができる。緑地の少ない道路での考察はヒートアイランドにおける人工排熱の原因を明確に把握するためには非常に重要だが、今回の条件において制約の多い緑地を含めての総合的な考察は大気汚染緩和の面から重要であり、今後の課題になると思われる。

多摩地区の自然環境に関する活動

—野川を事例に—

瀧澤 香子

東京都の多摩地区は、近年その環境を変えている地域である。この多摩地域において、人々が自然環境に対しどのような活動を行っているか調査した。

第一に、多摩の地域新聞『アサヒタウンズ』の約20年間の記事から自然に関わる活動を拾い、分類、考察を行った。その結果、多摩地域において自然保護などの活動は増加傾向にあり、またその活動形態や関心をもつ対象が多様化していること、活動主体同士がネットワーク化の傾向にあることが分かった。

次に、具体的な事例として、北多摩地区にその水源を持つ野川をめぐって活動を行っている団体に対し聞き取り調査などを行った。

野川は、武蔵野段丘と立川段丘の境目である国

分寺崖線から湧き出る複数の地下水を水源としている。昔から野川沿いには水田が広がっており、野川は農業用水路の一部のような役割を果たしていた。また、水質のよい湧水は人々の生活用水としても欠かせない存在であった。しかし、戦後の急激な市街地化にともない、水田は姿を消し、治水対策として行われた大規模な河川改修で、野川自身も大きく姿を変えた。こうして人々の生活と直接の関係を失った野川は、次第に汚水排水路と化し、一時は暗渠化までが叫ばれた。その後、下水道の整備、親水性の高い護岸などの整備、そして野川を守ろうという人々の活動の結果、野川はその価値を次第に取り戻しつつある。

野川をめぐる団体として、主に市民による科学調査を重視し、開発から野川や湧水を守ろうと活